

市長コラム

～今こそ地域連帯～

Vol.31



●4年ぶりの通常開催「五所川原立佞武多」大成功で閉幕！

4年ぶりの通常開催となった「五所川原立佞武多」は、大型立佞武多3台を含め14団体の山車が「ヤッテマレ」の掛け声とともに勇壮かつあでやかに運行し、5日間の日程が無事に幕を閉じました。今年は25周年の節目ということもあり、新たな試みとして「ごしょがわら めじゃ～ストリート」なども行われ、連日多くの市民や観光客でにぎわい、街全体が熱気と活気に包まれました。また「親子de立佞武多」もこれまで以上に大いに盛り上がりを見せていました。子どもたちははつらつとした姿を見て、このまつりが次代にしっかりと引き継がれていくことを確信するとともに、五所川原市の未来に希望の光が差し込むような感動を覚えました。

「コロナからの脱却」の象徴と位置づけた今年の夏まつりは、まさに大成功であったと感じています。運営に携わった皆さん、参加いただいた皆さん、ご協力いただいた皆さんに心より感謝を申し上げます。

●持続可能な地域社会の構築のため今こそ自治体間の連携

人口減少や少子高齢化が加速的に進む中、当市の人口が直近の7月末で5万994人と5万人を割り込むのも目前に迫ってきました。2005年の市町村合併当初の人口約6万2千人から約1万1千人減少したことになります。さらに、2035年には4万人を割り込む見込みとなっています。

また、当圏域6市町の人口が2020年国勢調査では、約11万9千人でしたが、2035年には約8万5千人台に、2045年には約6万5千人まで減少する見込みです。

高齢化率についても、当市では、直近の7月末で36.95%であり、2035年には45%を超え、2045年には50%を超えることが予想され、圏域全体では、2035年は49%、2045年には55%まで上昇すると見込まれています(国立社会保障・人口問題研究所の人口推計値)。

そうした状況の中、基礎自治体単位で行政運営をしているのは、今後ますます厳しさを増すことは明らかであり、この現実を踏まえ、将来的な地域社会の維持と圏域全体で

の持続的発展を見据え、中心市である五所川原市がどうあるべきかを考えるべき時に来ていると思っています。

市民一人ひとりの安心安全のために市民協働社会の構築を進めていくと同時に、急速な人口減少と複雑化・高度化する行政ニーズに対応するためには、関係自治体間の連携を進めていくことが重要であり、まさに今、必要な対策を講じなければならないタイミングに来ています。

現状、医療や教育、商業や観光面等の経済活動において、当市が多方面に圏域の中核的な役割を担っていますが、圏域全体の将来像を見据えた時、交通の要衝である当市が社会活動の拠点としての役割を担うということを意識した街づくりが不可欠です。

近年、県内外から当圏域に入って来る観光客やビジネスマンが増加しており、さらに、先日の地方紙の取材においても申し述べたところですが、再生可能エネルギー関連事業に従事する出張者等で宿泊の需要が高まっており、当市における宿泊体制のさらなる充実が急務となっています。

中心街は、今のままではその任を果たさきれていないのは明白で、この認識は商工会議所とも一致するところです。

宿泊客の増加に伴い、市内で経済的な動きが出ており、今こそ、中心街のにぎわいを創出し、新たな発展を遂げるチャンスであると考えています。そこで、私としては、市の玄関であり、顔でもある駅前を新たな発想で再構築し、宿泊と飲食を中心としたコンセプトで街を形成していきたいと考えています。

今後は、広域的な視点で課題を共有し、地域住民の生活を守っていくため、各自治体の枠にとらわれず圏域自治体間の連携体制をさらに深めるとともに、中心市である五所川原市の果たすべき役割を見定め、当市はもとより圏域全体の将来像を見据え、長期的なビジョンをしっかりと描きつつ行政運営を進めていかなければならないと考えているところです。

新たな街づくりの第一歩を踏み出そうとしている今、市民の皆さんにもご理解とご協力をお願いします。



令和5年度「五所川原立佞武多」開会式の様子



今年度の「親子de立佞武多」の様子